

第4回学術研究大会 テーマ：「がん患者のスピリチュアルケア」

大会長：村田 久行（京都ノートルダム女子大学大学院 特任教授）

日 時：平成22年10月3日（日） 午前9時半～午後5時（午前9時受付開始）

会 場：財団法人田附興風会 北野病院 5階 きたのホール（大阪市北区）

プログラム

大会長基調講演	9:30～10:30
がん患者のスピリチュアルケア～新たな展開：身体へ、外来へ、在宅へ	
演 者：村田 久行（京都ノートルダム女子大学特任教授）	
研究発表	10:30～ 12:00
座 長：原 敬（さいたま赤十字病院 緩和ケア診療科・緩和ケアチーム）	
演題1：がん患者の精神心理学的症状をどう捉え、どう応じるか ～〈キュア〉と〈ケア〉の視点からの考察～ 藤平 和吉（利根中央病院 精神神経科）	
演題2：アロマセラピーと身体的実存 嶋田 玲子（ヒールエナジー代表）	
演題3：呼吸困難と身体的実存～呼吸困難への現象学的アプローチ 片山 和久（阿南医師会中央病院 外科）	
休 憩	12:00～13:00
会話記録パネルディスカッション	13:00～14:30
サインからメッセージへ	
座 長：原田 直美（東京医療保健大学東が丘看護学部 保健室・学生相談室）	
パネリスト： 泊 奈津美（医療法人ナカノ会ナカノ訪問看護ステーション）	
福島 芳江（兵庫県立西宮病院 看護部）	
池田 久子（大阪傾聴塾代表・指導者）	
休 憩	14:30～14:50
シンポジウム	14:50～ 16:50
がん患者のスピリチュアルケア	
座 長：松原 貴子（市立伊勢総合病院 麻酔科・緩和ケアチーム）	
和栗 裕子（特定医療法人美杉会佐藤病院 看護部）	
シンポジスト：外来で化学療法を受ける患者の苦しみとケアの現状について 小西 元子（財団法人田附興風会医学研究所北野病院 看護部）	

がん患者のスピリチュアルケア～緩和ケアチームの立場から～
富安 志郎（長崎市立市民病院 麻酔科・緩和ケアチーム）
在宅福祉の現場でのがん患者のスピリチュアルペインとそのケア
田中 志乃（イムノ介護支援事業所 管理者兼介護支援専門員）

閉会の辞、研究会事務局からのお知らせ

16:50～17:00

大会長 基調講演

第4回 学術研究大会 会長 村田久行
（京都ノートルダム女子大学特任教授）

がん患者のスピリチュアルケア～新たな展開：身体へ、外来へ、在宅へ

がん患者へのスピリチュアルケアは社会的な状況の変化、研究と実践の深化に伴って新たな展開をみせている。

<緩和ケア外来、在宅に溢れるスピリチュアルペイン>

終末期がん患者のスピリチュアルペインを「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」（無意味・無価値・空虚など）と定義し、それらを人間存在の時間性・関係性・自律性の3次元から構造化してスピリチュアルケアの指針を示すことで始められたスピリチュアルケア研究と実践は、早期からの緩和ケアを謳う「がん対策基本法」の施行以降、その対象を終末期がん患者にかぎらず、緩和ケア外来、在宅でのがん患者のスピリチュアルペインとそのケアにも拡大しなければならない状況にある。

<身体的実存～タッチングによるスピリチュアルケアの可能性>

さらに、これまで言語を介した“傾聴”によって行われてきたスピリチュアルケアは、タッチングや日常介護などの身体的接触を介したスピリチュアルケアの可能性も探求される状況にある。ここに新しい視野を開くのが“身体的実存”の概念である。症状と痛みが緩和されず、押し黙って耐える患者の身体に他者が触れることで、患者が流涙・嗚咽し、感情を表出するのは、触れられることへの“身体的実存”の反応かもしれない。病む人は孤独である。その身体は、実存からみると不安定であり、常に緊張している。たとえ何もすることなく無為にベッドに臥床している患者であっても、その身体は不安定で緊張し孤独である。しかし、触れられることで実存である身体は安定し、緊張が緩み、嗚咽や感情の表出が促され、それに応えられることで孤独が癒される。身体を実存から捉えるこの視点が接触による患者

の嗚咽や感情の表出を解明すると思える。身体の次元で実存は他者と自律を回復し、将来を
生み出すのではないだろうか。

＜スピリチュアルケアの新たな展開＞

スピリチュアルケアの対象は終末期がん患者にかぎらない。早期の、在宅の、緩和ケア外
来の、一般病棟に入院中のすべてのがん患者に「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」
が認められるかぎり、スピリチュアルケアの必要性は強調されるべきである。

さらに患者の存在を“身体的実存”とみる視点が、スピリチュアルケアの新たな可能性を
切り拓き、それが言語による傾聴に加えて、患者の身体に“ふれる”ことによるスピリチュ
アルケアの新たな展開を示すものと考えられる。

対人援助・スピリチュアルケアの進化と深化

—第4回 学術研究大会を終えて—

第4回学術研究大会 大会長 村田久行

実り多い発表とディスカッションとともに今年も第4回学術研究大会（大阪）を終え
ることができました。大会をとおしていちばん印象深く思いましたのは、対人援助・ス
ピリチュアルケアの進化と深化です。大会のテーマをNPOの出発点でもある「がん患
者のスピリチュアルケア」に絞って、その内容を「新たな展開：身体へ、外来へ、在宅
へ」としましたのも、がん患者のキュア(治療)とケアが、まさに病院・病棟に局限されず、
外来へ、そして在宅へと展開される現状をスピリチュアルペイン（自己の存在と意味の
消滅から生じる苦痛）から捉えなおし、そこでのスピリチュアルケアの進化と深化を検
証したいと思ったからです。

その成果は、まずスピリチュアルケアの深化として午前の研究発表3題に示されまし
た。＜がん患者の精神心理学的症状＞、＜アロマセラピーと身体的実存＞、＜呼吸困難
と身体的実存＞という発表テーマに共通するのは、精神心理学的症状とは異なる実存の
視点からみたスピリチュアルペインとケアの独自性の追求でしょう。「身体的実存」とい
う聞きなれない表現に多少の違和感を覚えながらも、そこに、臨床で普段接している物
体としての身体ではない「生きられた身体」の存在とその身体的実存を通したスピリチ
ュアルケアの可能性を感じ取られた方々も多かったのではないのでしょうか。

また、午後のパネルディスカッションとシンポジウムでは、多職種のシンポジストの
参加で病院の緩和ケアチーム、化学療法外来のみならず、在宅での訪問看護、介護支援

などの広範囲の医療・福祉現場でがん患者のスピリチュアルペインはどこにでもさまざまな形態で存在するのだという現状が明らかにされ、そこに、病状の初期から終末期まで、あらゆる場面で実践されるべきスピリチュアルケアの進化と展開の方向性があるのだと、フロアとともに活発に議論し合えました。内容において盛会であったと思います。

これもひとえに、この学術研究大会に関心を寄せ、多くの支援をいただきましたNPO会員の皆様、大会運営事務局、そして意義ある発表と議論をしてくださった参加者の皆様のご協力のおかげと、心より御礼申し上げます。

今後とも、ご支援、ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。